

## 第1章

### 政治分析における「政治エスノグラフィー」の射程と有用性について： 政治的クライエンテリズム研究を中心に

上谷直克

#### 要約：

本稿では、政治的クライエンテリズムを実証的に調査・分析する手法のひとつとして重用されてきた政治エスノグラフィーの射程と有用性について検討する。まずこの手法が活用される意義や実際の使われ方について簡単に述べたあと、政治的クライエンテリズム研究の一環としてこの手法を利用した先行研究をいくつか紹介する。それらを踏まえた上で、この手法に依拠した研究の限界や問題点と、この種の研究の次の展開として、政治的クライエンテリズムを含む「貧者の政治実践」分析の今後の方向性について言及する。

#### キーワード：

政治エスノグラフィー、政治的クライエンテリズム

### 1. はじめに

過去数十年間のラテンアメリカ政治研究は、当該域内諸国における民主政治の成功（光）や限界や失敗（陰）の原因やその影響について理解しようと奮闘してきた。1980年代の民主化以降、概して多くの国々で、国政レベルでのデモクラシーや政治的自由の改善傾向が確認できる一方、例えば、地方レベルで残存する権威主義的な政治慣習、暴力的犯罪の急増、甚だしい人権蹂躪、公職者による汚職、怠惰で非効率な政治・行政機構、甚大な社会・経済格差など、政治的に適切に対処されるべき／政治学的に解明されるべき問題は山積している。本来こうした、どちらかといえばインフォーマルな権力関係、組織活動、政治・行政的慣習、または労働の在り方などの実態や発生・持続要因、またはさまざまな影響をつぶさに捉えるには、まさにエスノグラフィーのような学際的な方法が適しているとされる（Arias[2009: 239]）。しかし幸か不幸か、デモクラシーを作動させるフォーマルな諸制度やアクターの振る舞いの分析が主流となっている昨今のラテンアメリカ政治研究では（近年活発な、“政治”を扱う社会学や政治人類学は別と

して) 往々にしてこの種の手法は、マージナルな領域に押し込められ、それとして顧みられることも少ない。むしろ確かに、近年の混合研究法 (mixed methods) の流行の中で、サーベイ調査や統計分析を「補足する」かたちでエスノグラフィックな調査やデータが使用される頻度は増えているようである。しかし管見の限り、両者のタイプの調査研究法は、その目的や解明されうる知見はもちろん、そもそも方法論的前提 (存在論や認識論、確率論的／決定論的という意味での世界観) のレベルで大きく異なっており (Beach and Pedersen [2013]; 野村[2017])、例えば「概念の精緻化」といった限られた部分以外での、安易な混合は様々な問題を引き起こすものと思われる。それでは (比較) 政治研究の分野における政治エスノグラフィーという分析手法の固有の貢献とはいったいどんなものであろうか？

## 2. エスノグラフィーとは何か？

そもそもエスノグラフィー (Ethnography) のエスノ (ethno) とは、通常は「種族」や「民族」と訳されるが、エスノグラフィーの調査分析対象は必ずしもそうした民族やいわゆるエスニックグループに限定されるわけではないため<sup>1</sup>、むしろここでは、「それ特有の生活習慣や作法・考え方・振る舞い方などを共有する (と想定される) ような人々の集まり」程度で捉えておくのが適切だと思われる。一方、グラフィー (graphy) は元来ギリシア語で「描くこと」「記述すること」を意味し、こうした記述とは、ここでは、フィールドワークや参与観察によって、調査対象 (個人やその集まりや現象) に関するさまざまなかたちのデータを収集し、その分析や解釈を通じて、対象の特質がはっきり分かるよう秩序立てて書き記すことと理解しておく。したがって、方法としてのエスノグラフィー<sup>2</sup>は、特有の生活習慣や作法 (= これらの総称としての文化) を共有するような人びとの集まり、いわばコミュニティの日常に、フィールドワークや参与観察を通じて密着し、彼／彼女らが慣習的 (かつ無意識) に行う実践や作法の特徴、そこでの人間関係の様態、またはその場で生起するさまざまな出来事について、詳細にかつ秩序立てて描写し、調査対象そのものや、そこで作動する意味の体系を理解することである。

こうしたエスノグラフィーは、そもそも文化／象徴人類学で生まれ磨かれてきた、ネイティブ (その土地の人びと) の行為や活動を彼ら自身の文化の中で理解する調査方法に由来し、後に社会学の分野でも、例えば逸脱集団などの行動様式を解明する手法とし

---

<sup>1</sup> 『世界大百科事典 (第2版)』 (<https://kotobank.jp/word/エトノス-1149555>) によれば、エトノス (ethnos) とは基本的に「同一の文化的伝統を共有するとともに、“われわれ何々族、何々人”という共属意識をもつ最大の独立した単位集団」を指すとされるが、むしろそれに続く「従って、一つのエトノスは場合によっては、バンドでも、氏族でも、部族でも、さらにカーストでもありうる」という説明がここで重要である。

<sup>2</sup> 一般的にエスノグラフィーは、ここで触れている「方法としてのエスノグラフィー」に依拠した調査のアウトプット／成果物として「民族誌」と訳されることもある。

て活用されるようになった。また近年では、教育やソーシャルワーク、医療・看護の領域でも、例えば学校、教室、病棟、診察室など日常的でミクロな生活世界で織りなされる人間／集団関係や実践を解釈する手法として用いられている<sup>3</sup>。また最近では、ビジネスや経営（学）の分野でも、顧客や消費者のありのままの振る舞いや言動、そしてその背景を詳細に観察することで、消費者そのものの理解を深めるためだけでなく、商品／サービスの改善すべき問題点や想定外の利便性を見出し、まだ顕在化していないニーズを発見するといった新たなマーケティング手法として、(その他さまざまな質的調査・分析の手法とともに)脚光を浴びるようになっている。

なお、このエスノグラフィーとよく混同されがちなものにエスノメソドロジー (ethnomethodology) という分析手法がある。これは、社会の成員たち (=エスノ) が自分たちの社会生活を理解し・行動し・秩序付けるために使用する方法論 (=メソドロジー) に着目するという意味で、元々は研究の対象そのものを指す用語であったが、後にこうした対象を解明する方法およびそれを使用した研究の総称となった。従ってこのエスノメソドロジーでの中心的な問いは、日常の、ある空間に集う人びとが、いかなる方法論を駆使してそこでの秩序を保っているか、言い換えれば、人びとが多様かつ特徴的なやり取り (相互行為) や行動や理解の仕方を通じて、いかに日常世界における「それぞれの場」を成り立たせているのかというものである。むしろそこで注視される「人びとの方法論」は、エスノグラフィーで注視される「人びとが日常生活で実践する慣習や手続きや作法」の一部をなしているという意味で、より俯瞰的なこの手法にも重要な知見をもたらすと考えられる。しかし通常、エスノメソドロジーの分析対象はより狭く限定的な場や世界 (ユニバース)、概して、その中でも、あまりにも「当たり前と思われている日常的な活動 (プラサド [2018: 64])」であり、それに応じて分析上の問いもより絞られたものとなりがちである<sup>4</sup>。

### 3. 政治エスノグラフィーとは何か？

では、とりあえずエスノグラフィーを上のように理解するとして、今度はそれに「政治」という形容詞が付された場合に、この手法はいかなる対象を／いかに捉えるものとなりうるのだろうか。2000年代頃から徐々に注目を集めだした政治エスノグラフィーは、マンチェスター学派の政治人類学に起源をもち、社会学におけるコミュニティ研究 (シカゴ学派第三世代) や、運動内の「意味の生成」や動員フレームに注目する社会運動研究、そして文化社会学の分野での市民生活／アソシエーションの研究など、主に(文化)人類学や社会学の分野で発展してきた。それゆえ、従来の政治学や政治社会学が概してフォーマルな政治主体や組織、画定された制度領域 (delimited institutional domains)

<sup>3</sup> <http://www.ai.soc.i.kyoto-u.ac.jp/field/chapter5.html>

<sup>4</sup> 政治研究におけるエスノメソドロジーの可能性については、西山[2016]を参照。

などいわば「大文字の政治 (capital-P)」や構造に焦点を当てるに対し、政治エスノグラフィーは、例えば国家権力や「ナショナルなもの」や「グローバルなもの」が、ローカルな場や日常生活など特定のコンテキストで、いかなる形態や関係性や「人びとの実践や作法」を通じて、特定の意味を伴って現れてくるのかに着目する。つまり、(マクロなものに目配りしつつも) よりマイクロないしメゾレベルに焦点を合わせ、人びとが日常での政治的な出来事や局面やイシューをいかに意味づけ、それに対する態度や行動を、「やりとり」や「やりくり」を通じて、どのように選び取り・遂行し・「演じる」のか、またそうした実践が生活に埋め込まれているか、すなわち、日常で作動する「政治的なるもの (the political)」や時に知覚さえされない権力や支配の「生きられた経験 (the lived experience)」を詳らかにするのである。この意味で、政治エスノグラフィーは、広範な政治過程の中でのより微細なプロセスや「フォーマルな制度の外側で、パラレルに、または人知れずその内部で、すなわち政治生活の縁 (へり) や隙間でおこる政治」だけでなく、フォーマルな権力構造がインフォーマルに作動するさまや、制度と制度のあいだのグレーゾーンなどを凝視し探求しうる点において「標準的な政治学的手法」に対し優位に立つとされる (Tilly [2006]; Kubik [2009]; Allina-Pisano[2009]; Benzecry & Baiocchi [2017])。

実際、近年の政治エスノグラフィー研究では、日常世界での政治的／制度的行為や活動の意味的な側面が注目される一方<sup>5</sup>、例えば、それまで「政治」と見なされてきた／見なされてこなかった行為や事象、「政治」を構成するさまざまな概念、そうした政治が発現する時間や場、「支配」と「被支配」、「治者」と「被治者」、政治を担う／担わないとされてきた主体など、いわば慣例的に所与とされてきたさまざまな区別や境界線それ自体が再検討に付されることになる。そしてこのレンズを通して、乱雑な現実世界のあちこちで、没政治的なものが「小文字の政治 (small-p)」へと転換する可能性と、それを凝視することの政治 (学) 的な意義が示唆されるのである。

こうした着眼点やメリットを持つ政治エスノグラフィーに依拠し、とくに近年では、さまざまなテーマを扱った研究が生み出されている。例えば、ある制度や政策プロジェクトの目的・意図とその下にある人びとの (期待・予想外の) 振る舞いととの差という意味での「制度の効果」を見出すものや (Eliasoph [2011])、ステレオタイプに語られがちな各国の政治文化が、実際には、政治に関与する人々の実践知に従ってマイクロレベルで (構造として) 再生産されたり、変化しうることを示すもの (Mische[2009]; Luhtakallio[2012])。また、例えば、社会扶助活動やグラフィティ、その他のボランティアな活動など、日常のさまざまな場面で経験される「問題」が、社会や地域や集団の中で、または個々の参加者の中で、いかに「政治的な」問題として意識される／等閑視

---

<sup>5</sup> (そのような行為・活動・発話・態度表明などは、ゆくゆくはいかなる種類の「決め事」にとって、どんな意味を持つことになるのか)

される（ようになる）か、つまり政治化／脱政治化される（ようになる）かという経緯と理由を詳らかにするものなどである（Luhtakallio and Eliasoph [2017: 753-756]）。さらに、ミクロ・レベルの政治を捉えるのを比較的得意とするこの種の調査では、往々にして普通の人びと、中でもどちらかと言えば「不遇な人びと」に焦点が絞られやすいが、それゆえ彼（女）らが、選挙キャンペーンや抗議運動、パトロン＝クライアント関係など政治動員に日々関わる／巻き込まれる中で、どのような契機（例えば、恥の意識、信頼関係、犯罪組織の叢生）が、彼（女）らの行為や態度、「現実」や「政治」を捉える認識枠組みに変化をもたらすか／もたらさないかを解明する研究も多い（Wolford [2007]; Rutten [2007]; Steinhoff [2007]; Price [2007]; Desmond [2007]; Blee and Currier [2007]）。そこで以下ではこのようなテーマの中から、政治的クライエントリズムを対象を絞り、政治エスノグラフィーの手法でその解明を試みる J. アウジェロ（ら）の研究を紹介する。

#### 4. 政治エスノグラフィックな政治的クライエントリズム研究

いわゆる政治的クライエントリズムに関しては、その原因、形態、民主政治や政策形成に対するインパクトについて、すでに相当かつ詳細な研究の蓄積があり、いくつかの論点に関しては多少活発な論争も展開されている<sup>6</sup>。例えば、政治的クライエントリズムとデモクラシーとの（ネガティブな／ポジティブな）関係性や、いわゆるパトロネージが政治・経済的な発展におよぼす効果など、これらの論点をめぐっては依然、見解の不一致が存在する。しかし、民主化がクライエントリズム政治の盛衰におよぼすインパクト、すなわち、必ずしも前者が後者の衰退をもたらさないという点に関しては、ほぼコンセンサスが出来上がりつつある。むろん従来のそれぞれの研究は、方法論や分析の深さや幅、または事例調査の注目点において多様であるが、それらから共通した、典型的でいくらか明確な「ミクロ社会学的なシーケンス（a typical micro-sociological sequence）」は抽出されうる。つまり、パトロンは、選挙キャンペーン中にブローカーを通じて、典型的には貧しいコミュニティの住民に対し、例えば集会に出席するといっ

---

<sup>6</sup> 政治的クライエントリズムに関する研究には、個々のアクターの「利己」に着目してこの関係が維持されるメカニズム、ないしその背後の要因、例えば政治制度や政党組織、ブローカー・ネットワークを扱ったもの以外にも（Calvo & Murillo [2014]）、例えば政綱に基づかない政治が経済発展に及ぼす影響について論じるものや（Schaffer [2007]; Remmer [2007]; Robinson & Verdier [2013]）、社会政策や貧困対策、とくに条件付現金給付（CCT）とクライエントリズムとの関連やその効果を論究するもの（Brun & Diamond [2014]; De La O [2015]）などがある。さらに、経済発展のレベルの違いや国家官僚機構の没党派性などを踏まえた場合の、先進民主主義国と新興民主主義国における「分配政治」のあり方の違いを再検討したり（Wantchekon [2003]; Cook [2014]）、民主制の下でのアカウントビリティや正統性の確保や政治参加、または既存の秩序維持に際する、いわばクライエントリズムが果たしうるポジティブな役割を示唆するものなど、そこで使用される調査方法や分析技法の多様性も勘案すると非常に多岐にわたる。

た形での支持や選挙での票との交換で、便益・財やサービスを提供するという図式である。しかしこの、例えば「選挙での投票」や「集会への参加」という、政治的クライアントたる貧しき人びとの活動の中心については合意があるものの、こうしたクライアントの行動を促す説明要因に関しては、かつて優勢であった「互恵的な規範」の存在を重視する解釈や、また一方で、最近の議論で主流である、人びとの「合理的な計算の結果」だとする見方など、複数の観点が存在する<sup>7</sup>。そしてこれらの観点に従えば、もしブローカーが便益を提供し損なった場合、前者の見方では「互恵的な関係のバランスが崩れた」となり、また後者からすると「物欲を充足するには他の方法のほうが合理的である」となるので、いずれにせよクライアントらはパトロン＝クライアント関係を放棄することになる。

こうした政治的クライエントリズムの従来の考え方に対し、比較的早い段階から、政治エスノグラフィーの方法論を駆使して、これらと異なった観点を提示してきたのがJ. アウジェロである。彼はブエノスアイレス市辺境の貧民地区でのフィールドワークを通じて、クライエントリズムが「日常の問題解決へのインフォーマルなネットワーク」として意味を持つことを見出し (Auyero [2001])、その後もコミュニティレベルでの参与観察を重ね、例えば、クライエントリズムと集合行為との親和性 (Auyero [2003])、地方当局と「自然発生的」な暴動との隠された繋がり (Auyero [2007])、マージナルな人びとの環境被害と諦念 (Auyero and Swistun [2009])、また、一つの「政治支配の形態」として、貧しき人びとを待たせておくこと (poor people's waiting) (Auyero [2012]) や、貧者への／のあいだでのさまざまな「暴力」の存在 (Auyero and Berti [2015]) など、従来の政治学や社会学では所与とされてきたもの (概念) を問い直し、等閑視され

---

<sup>7</sup> こうして、クライアントであれパトロンであれ、またはそれらを繋ぐブローカーであれ、諸アクターの「利己」ないし「合理的行動」をクライエントリズム関係維持の根幹に据える見方が主流となるなかで、新たな問いやそれをめぐる論争が生じている (Brun & Diamond [2014])。例えば、「クライエントリズムを機能させるためには、秘密投票の原則が蔑ろにされる必要があるか否か？」換言すれば「クライアントの裏切り行為を罰するためにパトロンは何をしようのか？」という問い (クライアントの側でのコミットメント問題) をめぐって重要な論争が存在する。この問いに対しては、例えば、物質的な便益の供与ではなく公職の斡旋による買収 (つまりパトロネージ) の方が票集めには確実だとする見解や (Robinson & Verdier [2013])、より長期的な忠誠心の醸成やクライアントの (相互) 監視を目的とした組織的かつ稠密なネットワーク (= 集票マシン) の存在こそがコミットメント問題の解決には涵養だとする意見もある (Magaloni et al. [2007])。また他の争点としては、そもそも多数の有権者 (= 潜在的クライアント) が自らの票と便益とを天秤にかけ自己利益の最大化を目論んでいるとする場合、パトロン側では、例えば「浮動票 (swing voters)」か「コアな支持者 (core supporters)」か、どの層への便益供与により力を入れれば集票に最も効果的なのかといったものがある (Cox & McCubbins [1986]; Dixit & Londregan [1996])。これに関しては、Stokes のように「浮動票」、より正確には「コアでない野党支持者」がパトロン (この場合は与党) の便宜供与のターゲットとして適切だとする論者がいる一方 (Stokes [2005])、投票参加への波及効果も加味するとやはりコアな与党支持者にこそ様々なリソースをつぎ込んで投票に動員すべきだとする見方もある (Nichter [2008])。

がちだった日常生活に潜む政治性や権力性、支配のかたちを解明してきた。

そこで、(再び) 政治的クライエントリズムを扱った最新の研究においてアウジェロ(ら)は、上で見た従来のクライエントリズム研究を念頭に、例えば、得票の必要性が喫緊ではない「選挙と選挙のあいだの平常時」ではどのような動きがあるのか？または、ブローカーの差配ミスや、日常の問題解決のためのそれ以外のよりよい方法がある時でさえ、なぜ人びとがパトロン＝クライアント関係に固執し続ける(という”謎の行動”をとる)のか？といった問いは「従来のほとんどの議論の範疇にはなかった」と喝破する(Auyero and Benzecry [2017])。そして、クライエントリスティックな支配が実践される上での特徴をよりよく理解すべく、クライエントリズムを、選挙を取り巻く政治ではなく、日常的な政治の一局面として捉えなおし、ブローカーとその最も近いフォロワーたちとの強い繋がりが果たす役割に注目して議論を進める。そこで問われるのは、パトロン政治に埋め込まれた人びとが、本来なら非常に不平等な関係を所与のものとするとはいかなる事態か？(＝権力性の無意識化)、長きにわたる・拡散した互恵的なネットワークがいかに政治支配を正統化するのか？(＝支配の無問題化ないし“自然化”)、また、選挙ごとに勝者(それが野党の時でさえ)が変わりうるにもかかわらず、ブローカーの有する「クライアントのインナー・サークル」がクライアント関係を携わり続けるとはどのようなことか？(＝”非合理的な”支配＝被支配関係の持続化)といった問題群である。そしてこうした問いが、アルゼンチンのブエノスアイレス市内4か所の貧民地区でのフィールドワークを通じて解明される。結果、そもそも政治的クライエントリズムは、ルーティン化された日常生活の中にピッタリと埋め込まれている(染み込んでいる)ものでありうること、そしてそれゆえ、最も忠実なクライアントの行為は、規範意識や合理的計算の産物としてではなく、むしろクライエントリズム的なハビトゥス(clientelist habitus)と呼びうるもの<sup>8</sup>、つまりブローカーを中心としたインナー・サークル内での日々の相互行為の反復から生み出される認知的・感情的な政治的性向(a set of cognitive and affective political dispositions)によって理解されるべきことが示唆される。すなわち、従来のクライエントリズム論が想定するような、物の交換(計算)や互恵性を通じた支配のメカニズムとしてクライエントリズムが存在するのではなく、インナー・サークル内で日々繰り返される実践や相互認知は、クライアントらだけでなく、もはやブローカーの中においてさえ無意識に「血肉化」され、実はそれが効果的かつ持続的な「支配」を下支えしているのである。おそらくこうした発見は、従来の政治

---

<sup>8</sup> 「人びとは社会生活の中でさまざまな経験を積み重ねる。これら過去の社会的諸経験は、反復を通じて身体へと刻み込まれ、人びとの性向を形作る。このように過去の諸経験を通じて身体化された社会的性向はいったん獲得されれば、今度はある種の図式となって、あらゆる文脈で、必ずしも自覚を伴わずとも、一定の傾向性や規則性を備えた知覚・思考・評価・感覚・行為を生み出すように人々を駆動していくことになる。ブルデューは、こうした実践を生成する、持続的で移調可能な性向のシステムを、ハビトゥスと呼ぶ。」(友枝ほか編[2017: 214])

学で所与として捉えられてきた事象や概念図式やカテゴリー自体を、一方でフィールドワークにおいて蒐集された「気づき」やデータと、もう一方で、異なる文脈や角度から生み出された理論的観点（この場合 P.ブルデューのハビトゥス）とを引照することで再検討に付すという、政治エスノグラフィーならではの手法の賜物と言えるだろう。

## 5. おわりにかえて

最後に、政治的エスノグラフィーの方法論的可能性と、とくにラテンアメリカ政治(研究)を踏まえた場合の理論的可能性について少しふれておきたい。

かつて C. ギアツは「政治は、我われが慣例的に『文化』と呼ぶ意味の構造が鮮明に浮かび上がり、かつ、最も観察可能となるような主要な領域の一つである」と述べたという (Luhtakallio and Eliasoph [2017: 750])。もしそうであるならば、人びとの日常生活にどっぷりと浸り、彼(女)らがありのまま実践する政治的な慣習や作法の特徴、そこでの人間関係の様態、またはそこで生起する政治的な出来事に注視する政治エスノグラフィーの方法が、そうした場における文化とくに、政治的なそれを炙り出すのに長けていることになるのかもしれない。

例えば、こうした(政治)エスノグラフィーという手法の(実証的な比較研究の際の)大きな問題としてアリアスは、調査の末に得られた知見の一般化(可能性)の問題を挙げ、その解決策として、質的調査のガイドラインやインタビュー法の精緻化や、多国間/多事例間の共同研究の実施を推奨する (Arias[2009: 250-251])。しかし、そもそも(政治)エスノグラフィーにおいて、どこまで実証的な比較研究でいう一般化のようなものが目指されてきたのであろうかという意味で、そこが本当に「問題」なのか疑問が残るし、他の事例への一般化や比較可能性の問題は、何もとくに(政治)エスノグラフィーに限定されたものではないと思われる<sup>9</sup>。むしろ管見では、(政治)エスノグラフィーやより広く解釈アプローチの弱点は、依然としてつきまとう「解釈の恣意性」をめぐるものと思われ、上記のように、この手法によって炙り出された文化現象や行為の政治的意味は、やはりあくまでもその現象や行為に関して、この世に複数ありうる解釈の中の「ひとつの解釈」にすぎないという認識は肝要と思われる。とはいえこうした営為も、見方を変えて、既存の社会科学方法論のタームに換言してみれば、「仮説構築型」とまではいかずとも「結果説明型」の研究に限りなく近づくと考えることも可能かもしれない。となると、確かにこの種の政治エスノグラフィーを含む<sup>10</sup>、解釈系の研究アプローチは、

<sup>9</sup> たとえこれがサーヴェイ調査に基づく統計分析で、たとえそれがどれほど厳密に科学的な手法を駆使して行われた場合でも、恐らくそこから得られた知見は、通常、その調査が行われた時点の・地理的に限定されたサンプルの母集団に関するものであり、そうである以上、こうした「一般化」や「比較可能性」については同種の問題を孕んでいると思われる。

<sup>10</sup> むろん政治エスノグラフィーに依拠する研究には、「解釈型」でない「実証型」の研究も存在する (Kubik[2009]; Allina-Pisano[2009]; Wedeen[2012])。



昨今の社会科学の方法論争からは排除されがちではあるが (Goertz & Mahoney[2012: 4-5])、すでに存在する解釈アプローチをとる研究やその方法論をめぐる諸々 (Schwartz-Shea and Yanow [2012]; Yanow and Schwartz-Shea(eds.)(2014)) も勘案しつつ、例えば過程追跡あたりの方法論的知見 (Beach and Pedersen[2013]) を経由すれば、もしかすると「標準的な政治学の方法」の重要な一翼をなしうるものとなるかもしれない。もちろんその場合でも、「はじめに」で触れたように、複数の分析手法を使った混合研究における安易な「混合」は、その元の方法論のレベルから深刻な齟齬が生じるといって問題を生みうるため、現実のフィージビリティやさまざまな境界線を慎重に (真摯に) 見定めねばならないが。

一方、ラテンアメリカ政治 (研究) に特化した場合の、政治エスノグラフィーの理論的可能性について。今から約 10 年前にアリアスは、今後のラテンアメリカ政治研究における政治エスノグラフィーのリサーチ・アジェンダとして「汚職」「暴力」「政治制度 (議会、司法など)」を挙げていた (Arias[2009: 246-250])。しかし、例えば 2010 年代における当地域での治安状況の悪化を受けて、「暴力」関連のエスノグラフィーは (ジャーナリストイックなポルターージュも含めれば) すでにかかなりの数が出版されるようになってきている。だが、このテーマは往々にしてセンセーショナルな事件が取り上げられがちで、また、深遠な調査を行う上での安全上の問題もあるためか、いわゆる政治エスノグラフィーという、学術的な体裁を整えたかたちでの作品は、依然それほど多くない印象を受ける。しかし、政治学の教科書的な定義に従えば、「物理的な暴力の行使を独占」しているはずの近代主権国家において、これほど暴力が氾濫し、主権が断片化している状況は、政治学のメイン・テーマであるはずだし、またそうした暴力が蔓延る日常生活で普通の人びとが、あからさまな暴力や権力や支配と向き合い、その意味や意義を自分なりに解釈し、いかに「普通に暮らしている」のかといった問題／パズルは、おそらく政治エスノグラフィーでしか解明することができないように思われる。

むろん、この種の暴力だけでなく、日常のさまざまなかたちの「暴力」や、より広く日常のさまざまな「サバイバル」や「セキュリティ」の問題は、とくに、ポスト・ネオリベラル期にある社会の、最も脆弱な部分において死活的なものを構成しているはずである。例えばアウジェロが、クライエンテリズムやプロテストを (結局は“支配”のツールとして帰結するにせよ) むしろ貧者たちの日常的な問題解決の手段として捉え直したように、こうしたマージナルな人々の政治実践は、政治エスノグラフィックな研究の重要なテーマとなりうると思われる。この場合の政治エスノグラフィーは、例えば、日常のある特定の「政治」的な状況や、「政治」的に解決しうる問題に直面する普通の人びとの、状況認識／解釈の仕方やその下での振る舞い方といった「ハビトゥス」や作法を詳細に記述し、彼 (女) らが置かれた状況やコンテクストにおける、そうした行為の意味や理由 (ワケ) を探るといって方向で行われうるだろう。つまり、とりあえずそこで

解明されるべきは、無名の・普通の人びとが、一方で、権力や支配や暴力の関係が網の目のように張り巡らされたコミュニティや社会の中でいかに自らを位置づけ、「そういうもの」として振る舞い、またその一方で、いわば民主制下の一市民として、自らの境遇や日常で生起する問題に、いかなる作法や理由で、異議を唱えるか／唱えない（ようになる）のか、または、解決を試みるか／試みない（ようになる）のかといった問題群となるだろう。

## 文献リスト

### <日本語文献>

友枝敏雄、浜日出夫、山田真茂留 編 [2017] 『社会学のカー最重要概念・命題集』 有斐閣

西山真司 [2016] 「政治学におけるエスノメソドロロジーの寄与」 『名古屋大学法政論集』 268: 75-103.

野村康 [2017] 『社会科学の考え方ー認識論、リサーチ・デザイン、手法』 名古屋大学出版会

プシュカ・プラサド（箕浦康子 監訳） [2018] 『質的研究のための理論入門：ポスト実証主義の諸系譜』 ナカニシヤ出版

### <外国語文献>

Allina-Pisano, Jessica [2009] "How to Tell an Axe Murderer: An Essay on Ethnography, Truth, and Lies," in Schatz (ed.): 53-73.

Auyero, Javier [2001] *Poor People's Politics: Peronist Survival Networks and the Legacy of Evita*, Durham: Duke University Press.

———— [2003] *Contentious Lives: Two Argentine Women, Two Protests, and the Quest for Recognition*, Durham: Duke University Press.

———— [2007] *Routine Politics and Collective Violence in Argentina: The Gray Zone of State Power*, Cambridge: Cambridge University Press.

———— [2012] *Patients of the State*, Durham: Duke University Press.

Auyero, Javier and Debora Swistun [2009] *Flammable: Environmental Suffering in an Argentine Shantytown*, New York: Oxford University Press.

Auyero, Javier and Lauren Joseph [2007] "Introduction: Politics under the Ethnographic Microscope," in Lauren et al. (eds.): 1-13.

Auyero, Javier and Maria Fernanda Berti [2015] *In Harm's Way: The Dynamics of Urban Violence*, Princeton: Princeton University Press.

- Arias, Enrique Desmond [2007] "Routing Conflict: Organized Violence and Clientelism in Rio de Janeiro," in Lauren Joseph et al. (eds.): 110-134.
- [2009] "Ethnography and the Study of Latin American Politics: An Agenda for Research," in Schatz (ed.): 239-253.
- Bayard de Volo, Lorraine and Edward Schatz [2004] "From the Inside Out: Ethnographic Methods in Political Research," in *PS: Political Science & Politics*, 37(2): 267-271.
- Beach, Derek and Rasmus Brun Pedersen [2013] *Process-Tracing Methods: Foundations and Guidelines*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Blee, Kathleen M. and Ashley Currier [2007] "Are National Politics Local? Social Movement Responses to the 2004 US Presidential Election," in Lauren Joseph et al. (eds.): 156-179.
- Brun, Diego A. and Larry Diamond (eds.) [2014] *Clientelism, Social Policy, and the Quality of Democracy*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Carvo, Ernesto and Maria V. Murillo [2014] "Partisan Linkages and Social Policy Delivery in Argentina and Chile," in Brun and Diamond (eds.): 17-38.
- Cook, Linda J. [2014] "Eastern European Postcommunist Varieties of Political Clientelism and Social Policy," in Brun and Diamond (eds.): 204-229.
- Cox, Gary, and Matthew McCubbins [1986] "Electoral Politics as a Redistributive Game," *Journal of Politics* 48(2):370-89.
- De La O, Ana Lorena [2015] *Crafting Policies to End Poverty in Latin America: The Quiet Transformacion*, New York: Cambridge University Press.
- Dixit, Avinash and John Londregan [1996] "The Determinants of Success of Special Interests in Redistributive Politics," *Journal of Politics* 58(November): 1132-55.
- Eliasoph, Nina [2011] *Making Volunteers: Civic Life after Welfare's End*, Princeton: Princeton University Press.
- Goertz, Gary & James Mahoney [2012] *A Tale of Two Cultures: Qualitative and Quantitative Research in the Social Science*, Princeton: Princeton University Press.
- Hilgers, Tina (ed.) [2012] *Clientelism in Everyday Latin American Politics*, London: Palgrave Macmillan.
- Joseph, Lauren, Matthew Mahler, and Javier Auyero (eds.) [2007] *New Perspectives in Political Ethnography*, New York: Springer.
- Kitschelt, Herbert & Steven Wilkinson (eds.) [2007] *Patrons, Clients, and Policies: Patterns of Democratic Accountability and Political Competition*, New York: Cambridge University Press.

- Kubik, Jan [2009] "Ethnography of Politics: Foundations, Applications, Prospects," in Schatz (ed.): 25-52.
- Luhtakallio, Eeva [2012] *Practicing Democracy: Local Activism and Politics in France and Finland*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Luhtakallio, Eeva and Nina Eliasoph [2017] "Ethnography of Politics and Political Communication: Studies in Sociology and Political Science," in Kate Kinski and Kathleen Hall Jamieson (eds.), *The Oxford Handbook of Political Communication*, New York: Oxford University Press: 749-762.
- Magaloni, Beatriz, Alberto Diaz-Cayeros and Federico Estévez [2007] "Clientelism and Portfolio Diversification: A Model of Electoral Investment with Applications to Mexico," in H. Kitschelt and S. Wilkinson (Eds.).
- Mische, A. [2009] *Partisan Publics: Communication and Contention across Brazilian Youth Activist Networks*, Princeton: Princeton University Press.
- Nichter, Simeon [2008] "Vote Buying or Turnout Buying? Machine Politics and the Secret Ballot," *American Political Science Review* 102(1): 15-28.
- Price, Pamela [2007] "Honor and Morality in Contemporary Rural India," in Lauren Joseph et al. (eds.): 88-109.
- Remmer, Karen L. [2007] "The Political Economy of Patronage: Expenditure Patterns in the Argentine Provinces, 1983–2003," *The Journal of Politics* 69(2): 363–77.
- Robinson, James and Thierry Verdier [2013] "The Political Economy of Clientelism," *The Scandinavian Journal of Economics* 115(2), 260–291.
- Rutten, Rosanne [2007] "Losing Face in Philippine Labor Confrontations: How Shame May Inhibit Worker Activism," in Lauren Joseph et al. (eds.): 37-59
- Schaffer, Frederic Charles (ed.) [2007] *Elections for Sale: The Causes and Consequences of Vote Buying*, Boulder: Lynne Rienner.
- Schatz, Edward (ed.) [2009] *Political Ethnography: What Immersion Contributes to the Study of Power*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Schwartz-Shea, Peregrine and Dvora Yanow [2012] *Interpretive Research Design: Concepts and Processes*, New York: Routledge.
- Steinhoff, Patricia G. [2007] "Radical Outcasts versus Three Kinds of Police: Constructing Limits in Japanese Anti-Emperor Protests," in Lauren Joseph et al. (eds.): 60-87.
- Stokes, Susan [2005] "Perverse Accountability: A Formal Model of Machine Politics with Evidence from Argentina," *American Political Science Review* 99(3): 315–25.

- Wantchekon, Leonard [2003] "Clientelism and Voting Behavior: Evidence from a Field Experiment in Benin," *World Politics* 55 (April): 399–422.
- Wedeen, Lisa [2010] "Reflections on Ethnographic Work in Political Science," *Annual Review of Political Science* 13(1): 255-272.
- Wolford, Wendy [2007] "From Confusion to Common Sense: Using Political Ethnography to Understand Social Mobilization in the Brazilian Northeast" in Lauren Joseph et al. (eds.):14-36.
- Yanow, Dvora and Peregrine Schwartz-Shea (eds.) [2014] *Interpretation and Method: Empirical Research Methods and Interpretive Turn*, New York: Routledge.